

昭和26年松筑地方に於ける細菌性赤痢に就て

昭和27年5月6日受付

国立松本病院内科

荒井 謙 丸山 満典 茅野 博
 小野木 貞久 本田 菊王 小沢 一雄
 同 小児科
 大久保 佐助 犬飼 剛

Clinical Observation on the Case of Bacillary Dysentery in Shochiku District,
 Nagano Prefecture, in 1951, made by the Matsumoto National Hospital.

Department of Internal Medicine, Ken Arai. Mitsunori Maruyama. Sadahisa Onogi.
 Hiroshi Chino. Kikuo Honda. Kazuo Ozawa.

Department of Pediatrics, Sasuke Okubo, Tsuyoshi Inukai

Period: From the Beginning of January to the end of September.

Above mentioned specialists treated 90 dysenteric patients and observed their clinical symptoms, especially the effect of sulfa Drugs and Chloramphenicol. 63.3% of the Patients were children, male and female Patients were almost equal in number. The average Hospital treatment days were 22.9, and only two children died. Bacillie were proved at 61.3% of the patients. The efficiency of chloramphenicol was 83.9%, while that of sulfa-drugs was 31.6%.

緒 論

近年細菌性赤痢の特効薬として Sulfa 剤が広く用いられて著効を収めていたのであるが、此の数年来本剤に極めて強い耐性を示す駒込 BIII 菌に因る赤痢が流行し、茲に初めて、本病に抗生物質を必要とするに至つた。古屋氏、小酒井氏等は、赤痢患者の約半数が Sulfa 剤（以下 S 剤と略す）耐性を示すことを見て居り、又齊藤氏等は Streptomycin や 2, 3 の S 剤により糞便中の赤痢菌が容易に消失しなかつたものが、Chloramycetin（以下 Ch. と略す）によつて、急速に消失した駒込 BIII 菌赤痢の 1 例を報告して居り、昭和25年第4回日本公衆衛生学会討論会席上、駒込病院内山氏は S 剤の有効率に就いて、昭和23年 81%、昭和24年 54%、昭和25年 43%と、又荏原病院長岐氏は同じく、昭和17年 70%、昭和22年 61%、昭和24年 39%、昭和25年 36%と逐年有効率が低下しつつあることを発表している。

私達は、昭和26年1月から、同年9月末日迄に、松筑組合立伝染病院に於いて、90名の細菌性赤痢患者を診察し、其の臨床症状、就中、其の S 剤耐性に関して些の知見を得たが、私達の非才、本報告の完璧は期し得べくもないが一応調査をまとめたので、敢て此れを報告して大方の批判を仰ぐ次第である。尙疫学的観察は、松本保健所が分擔して長野県公衆衛生学会で報告された。

臨床所見

1. 患者の年齢、性別。

患者の年齢は別表1の如く、0~3才 10名、3~5才、15名、5~15才、32名、15~30才、17名、30~50才、8名、50才以上 8名で、5~15才の少年期のものが最も多く、青年期の者がこれに次ぎ年齢が若小と、年齢を増すに従い患者が減少する傾向が見られた。

性別は同表の如く、男子、47名、女子、43名と、男子がやや多かつた。

2. 入院日数。

患者 1人平均入院日数は、22.9日（最長 78日、最短 1日）で、年齢、性別に依る差異は見られなかつた。

3. 重軽症の別。

同じく別表 1、の如く軽症 43名で最も多く、次いで重症の25名、中等症の17名の順となり、重症度と年齢性別との間には有意の差は認められなかつた。

次に発病から入院までの日数と其の後の経過との関係は、別表 2 の如く、重症者は比較的早期に入院し、軽症者は可成り長期間自宅に於いて療養する傾向があることは当然の結果であらう。又表の如く、小児に於いては疫痢は予後の不良を慮る為か、一般に早期に入院することが見られた。

4. 死亡率。

死亡者は小児の 2 名 (2.2%) で、何れも入院時重症で、数日を出ずして死亡した者のみであつて、年齢

第一表 年齢別、性別、細菌性赤痢患者表

年齢	性別	例数	平均入院日数	症状別			転帰
				重症	中等症	軽症	
0~3	♂	6	24日	1	1	4	
	♀	4	24日		1	2	
3~5	♂	7	26日	3	0	4	死亡(1)
	♀	6	24日	2	3	1	死亡(1)
5~15	♂	13	26日	3	2	8	
	♀	19	21日	0	6	13	
15~30	♂	11	25日	5	2	4	
	♀	6	33日	3	2	1	
31~50	♂	5	23日	1	0	4	
	♀	3	31日	0	0	3	
50以上	♂	3	19日	1	1	1	
	♀	5	22日	3	0	2	

第二表

症状別と発病より入院迄の日数				
症状別	性別	例数		発熱より入院迄の日数
		♂	♀	
重症	小児科	7	3	1日
	内科	7	3	28日
中等症	小児科	3	10	2日
	内科	3	1	2日
軽症	小児科	17	17	3日
	内科	7	5	13日

第三表 臨床症状

	一般状態	熱		食欲		意識障害	循環障害	腸後重	腸状物	腹痛	下痢															
		有	無	有	無						有	無	有	無	有	無	有	無								
小児科	35	12	10	35	22	19	18	30	9	48	8	49	6	51	13	44	2	55	36	6	4	23	19	0	4	
内科	23		10	18	15	17		16		4	29	12	21	13	20	13	20	13	20	17	2	9	5	20	0	2

(保菌者4名、下痢なきもの1名を除外す)

的には3~5才の者であつた、性別では、男子、女子各1名である。

5. 初発症状。

初めて医師を訪れた際の主訴として、成人に於いては、下痢が大部分(92.8%)の26名で、此の中20名は粘血便を示し、次いで粘液便の11名、膿便の1名となつて居る、発熱のあつた者は8名(28.6%)、裏急後重あつた者2名、腹痛あつた者1名、保菌者4名であつた。

小児に於いては、下痢を訴えた者42名(73.7%)で成人より少く、発熱あつた者27名(47.4%)で成人に比して多く、嘔吐、痙攣、意識障害等神経症状を呈した者10例、裏急後重あつた者6名、腹痛を訴えた者2例、保菌者4名であつた。

6. 入院後の症状

表3の如くであつて、此の内意識障害が見られたのは、小児に於いて9名であるに比し、成人に於いては皆無であつた。

循環器障害(チアノーゼ、頻脈、心悸亢進等)は、小児14%、成人16%で、両者に大差は認められない。下痢回数は1日5回以下の者は小児に比較的多く、成人は5~10回の者が最も多かつた。又其の性状は小児に於いては粘液便最も多く成人に於いては粘血便が最も多かつた。

合併症としては、成人に於いて、2名の腎盂炎、1名の膽嚢炎、小児に於いては、アンギーナ1名、血尿1名、気管支炎1名、消化不良症1名であつた。

7. 病原菌。

別表4の如く、病原菌を証明し得た者は、61.3%で此の中44.4%の駒込BⅢが最も多く、これに次いで大原菌の13.2%、又成人と小児に於いては略同率に駒込BⅢを証明した、駒込A菌、中村菌は成人にのみに

第四表

菌型	例数	百分率	平均入院日数	重症	中等症	軽症
駒込BⅢ	40	44.4%	26.1日	8	9	23
駒込A	1	1.1%	25日			1
大原	12	13.2%	24.1日	3	1	8
中村	2	2.2%	56.5日	1		1
二木	1	1.1%	37日			1
川瀬	1	1.1%	25日			1
箕田	1	1.1%	34日		1	
昭和	1	1.1%	17日		1	
陰性	31	34.1%	18.1日	11	5	15

第五表

	スルファ剤の症状消失に対する効果						フ剤無効の他剤の効果					
	菌型	効果	例数	量 日数	最大量	最少量	薬剤	効果	量 日数	最大	最少	
成人	駒込BⅢ	症状消失	13	36.4g/ 5.9日	90g	6g						
		無効	2	20g/ 45日	28g	12g	クロマイ	有効 2 無効	4.5g/ 35日			
	大原	症状消失	3	41.7g/ 7日	54g	36g						
		無効	0									
	中村	症状消失	0									
		無効	2	33g/ 7日	48g	18g	クロマイ グアノフラシン	有効 1 無効 1 有効 0 無効 2	9g/4日 9g/6日 6.3g/23日	10.7g	2g	
	駒込A	症状消失	1	16.5g/ 3日								
		無効	0									
	陰性	症状消失	12	34.5g/ 6日	72g	12g						
		無効	0									
小児	駒込BⅢ	有効	15	15.6g/ 7日	23g	8g						
		無効	8	22.4g/ 9.4日	18g	14g	クロマイ フラシン	有効 2 無効 1 有効 5 無効 0				
	大原	有効	8	21.3g/ 8.2日	32g	11g	モナフラシン	有効 1	0.03g/ 13日			
		無効	1	21g/ 11日			クロマイ	有効 1 無効 0	3g/3日			
	その他	有効	3	4.4g/ 3日	34g	21g						
		無効	1	18g/ 8日			クロマイ	有効 1 無効 0				
	菌陰性	有効	18	16.1g/ 7.5日	31g	8g						
		無効	0									

証明し、小児に於いては、大原菌、二木菌、川瀬菌、箕田菌、昭和菌を検出し、其の他 1 名の菌型不明の赤痢菌を見た。

菌型別の平均入院日数は、中村菌の 56.5日、二木菌の37日、箕田菌の34日その他は菌型に依る大なる差は認められなかつた。

菌陽性者と陰性者、又菌型別による重軽の差に於いても大なる差は認められなかつた。

8. 転 帰。

死亡者は 2名で、何れも入院当日或いは翌日死亡した。其の他は怪快 1名、保菌者 1名で他は何れも治癒退院した。

治 療 に 就 いて

私達は今期の細菌性赤痢患者の治療方針としては、

上司の指示に拠り、先づ S剤を使用し、本剤の効果を見ない時初めて、Ch 或いは Furacin剤(モナフラシン或いはグアノフラシン)(F. MF. GFとそれぞれ略称す)を使用することとした。

1. 主要症状消失の効果(第5表)

A. S剤の効果をも菌型別に観察すること

a) 駒込 BⅢ の88名に就いて S剤によつて、主要症状消失したものは28例の 78.9%、無効例の10名であつた。又成人に於いては、有効13例(88.7%) 其の平均使用日数は 5.9日、平均使用量は 36.4瓦、無効は 2例、其の平均日数 4.5日、平均使用量は 20瓦で、又小児に於いては、有効15例(65.2%)、無効 8例(34.8%)で、有効例の平均使用日数 7.9日、平均使用量 15.6瓦、無効例の平均使用日数は

第 六 表

	S剤による菌消失に対する効果					S剤無効例の他剤の効果						
	効果	例数	量 日数	最大	最少	薬 剤	効果	量 日数	最大	最少		
成人	駒込BIII	有効	3	29.5g/8日	57g	13g						
		無効	12	50.5g/16日	193g	18g	クロマイ	有 11 無 1	7g/4.4日 27g/17日	18g 27g	3g	
	大原	有効	2	43.5g/7日	54g	33g	フラシン	有 無 1	1.35g/7日			
		無効	1	53g/13日			クロマイ	有 1 無	2g/1日			
	中村	有効	0				フラシン	有 無 1	1.65g/7日			
		無効	2	33g/7日	48g	18g	クロマイ	有 1 無	9g/4日			
	駒込A	有効	1	30.5g/16日			フラシン	有 無 1	10g/36日			
		無効	0									
	小児	駒込BIII	菌消失	2	24g/11日	25g	23g					
			無効	21	18.8g/8日	23g	8g	クロマイ	有 11 無 2	3g/8日 3g/8日		
大原		菌消失	7	17.7g/7日	34g	11g	フラシン	有 8 無 0	0.72g/8日	21g/16日	0.28/5日	
		無効	2	27.9g/14日	34g	21g	モナフラシン	有 1	0.08g/3日			
その他		菌消失	3	4.4g/3日	7.5g	2g	クロマイ	有 2 無 0	3g/3日			
		無効	1	18g/8日			クロマイ	有 1 無 0	2g/3日			

9.4日、平均使用量は 22.4瓦であつた。
 b) 中村菌の 2例に於いては、平均 7日間 31瓦で S剤の効果は見られなかつた。
 c) 大原菌の12例に於いては11例有効中、成人に於いて全例有効であつて其の平均使用日数 7日、使用量 41.7瓦、小児に於いて 8例が有効、平均使用日数 8.2日、平均使用量 21.3瓦であつた。無効の 1例は小児で11日間、総量21瓦を使用した。
 d) その他駒込A菌、二木菌、川瀬菌、昭和菌は有効 4例、無効 1例であつた。
 e) 菌陰性30例は全例有効で、其の平均使用日数は成人 6日、小児 7.5日、平均使用量は成人34.5瓦、小児 16.1瓦である。

B. Ch. の効果を菌型別に観察すると。

a) 駒込 BIII菌 5例に使用し 4例無効であつて、内成人は 2例平均使用日数 3.5日、平均使用量4.5瓦

小児の 2例は平均使用日数 3日間、平均量 3瓦であつた、又無効の 1例は小児で 3日間 3瓦を使用した。

b) 中村菌の 2例は有効、無効各 1例で、有効例の使用日数 4日、使用量 9瓦、無効例は 6日間9瓦を使用した。

c) 大原菌の内 1例の S剤無効例に Ch. を 3日間 3瓦を使用して症状の消失を見た(小児)。

C. 下痢

a) 駒込 BIII菌の 5例に GF を使用し全例有効で平均使用日数 8日、平均使用量 0.72瓦(小児)、此の他 MF は 1例に就いて 8日間 0.6瓦を使用し有効であつた。

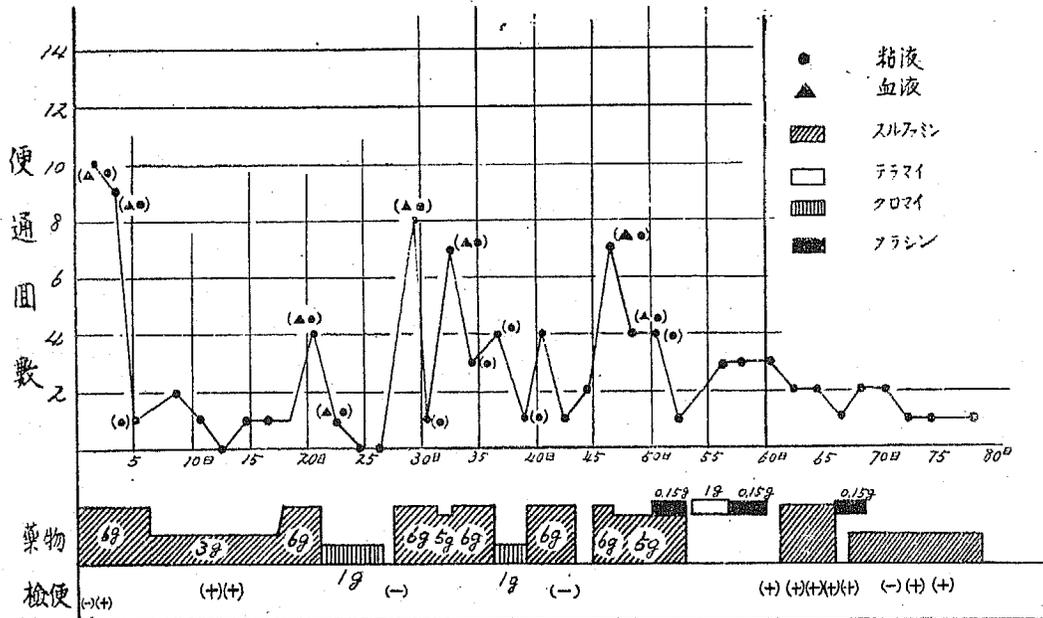
2. 菌消失の効果(第 6 表)

A S 剤の効果を菌型別に観察すると。

a) 駒込 BIII 38例に使用し、有効 6例(15.8%)、

スルファミン }
 クロマイ } の全てにより菌消失のなき患者の一例
 テラマイ }
 フラシン }

患者 山 〇 一 〇 21才 男子



(註) 薬物の凡数は1日の投与量を示す

無効32例 (84.2%) であつて、此のうち、成人に於ては、有効3例 (20%) 其の平均使用日数8日、平均使用量29.5瓦。又無効12例 (80%) の平均使用日数16日、平均使用量50.5瓦であつた。次に小児に於ては、有効3例 (13%)、此の平均使用日数11日、平均使用量24瓦、無効20例 (87%) の平均使用日数8日、平均使用量18.8瓦であつた。

b) 中村菌の2例に対しては、全例無効で、使用日数の平均は7日、使用量の平均33瓦である。

c) 大原菌12例に使用し9例有効、3例が無効であつた。

これを成人に就て見ると、3例中有効2例、其の平均使用日数7日、平均使用量43.5瓦、又無効の1例は13日間53瓦を使用した。

一方小児に於ては、有効7例で、其の平均使用日数7日、平均使用量は17.7瓦で、無効2例の平均使用日数14日、平均使用量27.9瓦であつた。

d) 其の他の菌型に就ては、5例中、箕田菌の1例に無効であつた他は、全部有効であつた。

B Ch. の効果を菌型別に観ると。

a) 駒込 BIII 25例に使用し、有効22例 (88.9%) で

あつて、これを成人と小児に区分して観ると、成人に於ては、12例中11例に有効であつて、其の平均使用日数は4.4日、平均使用量は7瓦であり、無効の1例は、17日間、27瓦を使用した。

又小児に於ては13例中11例に有効で、其の平均使用日数は、3日、平均使用量は3瓦で、無効の2例に於ても、3日間3瓦を使用した。

b) 大原菌3例に使用し全例有効で、成人の1例は1日間2瓦を、小児の2例では何れも3日間3瓦を使用した。

c) 中村菌2例に本剤を使用し、有効無効各1例で、有効例は4日間9瓦を、無効例は6日間9瓦を使用した。

d) 箕田菌に使用し3日間3瓦で菌の消失を見た (小児)

C 下痢。

a) 駒込 BIII. 小児に於て GF を8例に使用し全例に有効であつて、其の平均使用日数8日、平均使用量0.72瓦であつた。此の他 MF を使用し3日、0.08瓦で有効であつた。

b) 大原菌、成人1例に MF を7日間1.65瓦使

用したが無効であった。

c) 中村菌1例にMFを使用し、36日間12瓦で無効であった。

最後に、80日間在院して、S剤、Ch、テラマイシン、F剤等の治療に抗し、遂に保菌者として退院した21才男子の1例を図示して参考に供する。

考 按

1. 従来細菌性赤痢に対して、S剤特に Sulfathiazol, Sulfaliadin, Phtharylsulathiazol 等或いわこの混合剤が特効的に作用すると考えられて居たが、最近これ等のS剤の無効例が増加しつつあり、私達の経験に依つても、菌陽性者57例中39例(68.4%)に於いて耐性を見て居り、此の大部分は駒込BⅢ菌であった。木村氏も新潟附近に於いて流行した抗S剤赤痢は駒込BⅢ、昭和菌が主であることを報告している。又前掲の古屋氏等は最近来流行の細菌性赤痢はS剤の使用によつて、臨床的恢復は速やか或いわ比較的速やかであるが、排菌が執続に続きS剤約40瓦の経口投与で排菌の止まぬ者が52.2%あることを見て居り、私達も略同様な経験をj得ておる。
2. Ch. はS剤無効なものに対して著効を示しS剤無効の31例に対し26例(83.9%)が菌消失を見た。然し本剤と雖も尚5例の無効例のあることは注目を要す。
3. 下剤がS剤、Ch. の効果のない患者に於いて相当の効果を示し、有望な薬剤と考えられるが、使用例

勘ない為、的確な判定が得られなかつた。前掲木村氏等は抗S剤赤痢菌が、下痢1日1.0~1.5瓦服用で3日以内に消失すると報告している。

結 論

私達は、昭和26年度(9月末日迄)に、90名の赤痢患者を診療した。患者1人の在院日数の平均は22.9日、転帰は死亡2、保菌者1の他は全部、軽快或いわ治癒である。赤痢菌を証明し得た者は61.3%で、此の中67.8%は駒込BⅢ菌であった。S剤の有効率は、31.6%であるに反し、Ch. の有効率は83.9%であった。下剤は使用例数が少ない為、結論を下し難いが、相当有効のように思われた。

尙本文の要旨は昭和26年長野県公衆衛生学会席上で発表した。

文 献

1. 古屋暁一、小酒井望 et al. 臨床内科小児科 6, 10:439.
2. 長岐佐武郎 公衆衛生 9, 1:17.
3. 内山圭悟 公衆衛生 9, 1:13,
4. 堀江直友 et al 児科診療 14, 1:47.
5. 齊藤宗恕 治療薬報 486, 13.
6. 木村元 et al 日本内科学会雑誌 39, 8:309.
7. 山口正義 日本医師会雑誌 24, 12:1084.
8. 鈴木武定 日本伝染病学会雑誌 24, 5-6.
9. 日本医事新報 1373:2187, 赤痢に関する座談会.
10. 浅野秀二 児科診療 14, 7:381.
11. 泉仙助 et al 赤痢に対するグアノフラシンの効果(冊子)

結核性リンパ腺炎に於けるビタミンD₂、ストレプトマイシン及びバスの局所注射療法

Local Infection of Vitamin D₂ Streptomycin, and Para-Aminosalicylic Acid in Tuberculous Lymphadenitis. G. Cocozza. Pediatrics 57:521 1949.

50~100mgのストレプトマイシンをリンパ腺に注入して20人の小児の結核性リンパ腺炎の治療をした。腺が既に化膿していた時は膿を吸出して、その部を生理的食塩水で洗滌した。これにより好結果が得られた。この際カルチフェロール(ビタミンD₂)の注射をストレプトマイシンと共に用いることが有効であった。カルチフェロールのみで有効と思われたものも数例あつた。併しバスの注入は殆んど有効と思われなかつた。

(信大小児科 小林抄)